

石垣のリノベーションと発見

2016 年と 2017 年には、姫路城の正門付近にある内堀の石垣の大規模な整備が行われた。この打込ハギの工法で作られた石垣は、17 世紀初頭に増改築を行った大名・池田輝政（1565～1613）の作だと伝えられている。城壁の修復は、木の根で押し出された石を丁寧に取り除き、根を掘り起こして元の位置にはめ込んだ。また、落下した大きな石と大きな石の間を埋める小さな石である「間詰め石」の代わりに、入れ替えを行った。このようにして、研究者たちは石垣の材料や施工技術について多くのことを学んだ。

排水の様子

外側の石と土の間には、0.5～1m の厚さでこぶしほどの大きさの石が詰めてある。この石は「裏込め」と呼ばれ、雨水が外石の裏に溜まらずに排水され、壁の崩壊を防ぐ役割を果たしている。

楔の跡

打込ハギの壁に使われる石は、表面がザラザラしていて加工がされていない。しかし、作業員が壁からブロックを取り除いたところ、石の中には大きな岩を割ってできた石があったことがわかった。この石は、分割するために使用された楔の跡が残っている。場合によっては、作業員はこの楔の跡で、元々同じ岩から来た石と一致させることができた。

石垣の刻印

この石垣をばらばらにしたところ、丸の中央に一本線という刻印が発見された。姫路城内の石垣では 50 種類の刻印が見つかり、碑文は 90 種類近くとなる。刻印の意味や目的は完全には解読されていない。その石がどの石切り場からやってきたものなのかを示すものや、石積み職人集団のシンボルなどと推測されており、石が置かれる場所を指定する印だとも想像される。